
浮遊不能天使

青空子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮遊不能天使

【Nコード】

N0577C

【作者名】

青空子

【あらすじ】

幼馴染といたって、高校になってから喋る回数は減ってきたし、もしかしたらこのまま自然消滅(て、幼馴染に自然消滅も何も無いわけだけでも)かな、なんて思っている矢先に、その幼馴染に羽が生えた。どうなってるんですか、一体。いや、泣きつかれても。

(少女談)

1 月曜日・朝

朝突然、自分の背中に羽が生えていたらどうします？

それはいつもと変わらない朝8時15分。

私は、いつも通りの道を歩いて登校する。天気は晴天。悪くない気分。

いつも通り、まだ静かな商店街。シャッターが開くのは、もう少し時間がたってからだ。私は、ここを歩くのが好きだった。

(今日は月曜日…あー、体育があるや。ダル…)

なんて、今日のことを考えながら歩く。すると、その商店街の店のうちのひとつから、悲鳴が聞こえた。

しかも、なんだかとっても聞き覚えのある。

(…これは。)

わたしは不信感を覚えて、音の発信源に顔を向けた。この声は、確か、私の幼馴染のその筈。

「……………おはよう。ミエ。」

私の予感は大当たりしていた。確かに悲鳴を上げたのは、私と付き合いが長いそいつで、私が家（正確にはお店から入ったのだけど）に入ると、奴は自分の部屋でシンデレラみたいに膝と両手を畳につけて、おまけにおでこまで地面に近くして絶望のポーズを取っていた。

この顔、知っている。この商店街の唯一の古本屋に住んでいる一人息子の原田卓也。

確かにそいつは原田卓也の顔をしていた。体つきも、声の調子も確かに、昨日学校で会った時のままだ。はらだたくや。

けれど、私がそいつを原田卓也と認識するのには、ちょっとした障害があった。

それは、卓也の背中についている羽のようなもの。物体。

そう、私はいま、原田卓也という人間の姿をした天使を見ていた。

2 月曜日・朝（続）

「……………」

「……………」

「…コスプレなら秋葉原に行ってやってよ、たく。」

「……………第一声がそれ？」

お互い、今の間をとても長く感じただろう。だって、この部屋の時間の流れが止まったもの。

「だから、それっていわゆるコスチュームプレイでヤツでしょ？最近流行ってるからやりたくなっただんでしょ？でもたくってば、自分がコスプレしたくてやって見たは良いけど、羽をつけてみてちよつと羞恥心と後悔が頭をよぎったのね、うん、分かってる。分かっている。よおつく分かったから、今日はゆっくり寝ときなさいよ、それ外してさ。うん。学校には来なくて良いわ。てか来んな。しっかり頭冷やしてね。得意の瞑想でもしてなさいよ。」

と、私は一気に、けれど静かにそう喋った。目の前にあるのは、ちよつとコスプレしたくなっただくだ。間違いない。けして天使なんかではない。うん。

「じゃあ、私は学校に行ってくるから。」

そう言っただけで私は部屋を出て行くとした。手を、す、と上に上げてさよならーと横に僅かに振る。そのまま、たくを見たま後進する。

「大丈夫。絶対誰にも言わないから！」

「ちよつと、ちよつと、待った!!」

…と、私が振っていた手の、手首をガシリとたくは掴んだ。こいつ、私がこの後全力疾走して逃げ出すのを予知しやがった。

で、捕獲。

「ちよつと待って。確かに。確かにね？目の前の現実を認めたくない気持ちは分かる。でもね、一番認めたくないのは僕だよ！」

遂に、たくは目に涙を浮かべはじめた。やばい。末期だ。自分がコスプレした事がよっぽどコンプレックスになっているんだ。

「そんなに羽を生やした自分にヒいたわけ?!大丈夫よ、結構可愛いから！」

泣くほどショックを受ける事無いわよ!世界にはそういうあんたを優しく包み込んでくれる素敵の方々が絶対いるわ!」

「そろそろそこから離れろってば!!ちよつと僕の話聞いてよ!」

もう、頼れる人なんてお前意外に思いつかないんだよ。そう言った時に零れ落ちた涙は、私の手の甲に綺麗にぼたりと落ちた。

「つ…つかさ、大体コスプレでショック受けて、さすがにそれで悲鳴は出さないでしょ?!」

半ば叫び気味になり始めたたくを、私は静かになだめた。

「お…おー…そう言えばそうだよね…」

私の脳は、フル回転で今の状況を把握しようとし始めていた。

で。コスプレじゃないって事は？

私の頭は煮えた鍋のような音で思考を持続していた。やばい、そろそろ煮えすぎて沸騰する。

「……………じゃあ、それは？」

私がたくの背に乗っている綺麗な白いソレを指差すと、たくはくるとこれまた綺麗に半回転して私に背を向けた。その時、羽が少し散った。そして、私の顔に少し当たる。痛いというよりも、こそばゆい。

何故だが、昔小学校の飼育小屋で鶏と遊んだ時の事を思い出した。

ふわりとした一枚の羽、それは、確かに今たくの背中の翼から落ちたヤツだ。拾うと、優しく、ちよつと暖かった。

うん。

……………やけに、本物っぽいじゃないのよ。

「あの。」

「…なに、ミエ。」

「わたくし、今全く状況が把握できないんですけど、でも」

「…。でも、なに？」

「そこに翼が生えているっていうのは、紛れもない真実みたいね…」

そう言った私をみてたくは、やっと信じてくれた、と今日初めての心からの微笑を浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0577c/>

浮遊不能天使

2010年10月10日06時31分発行